

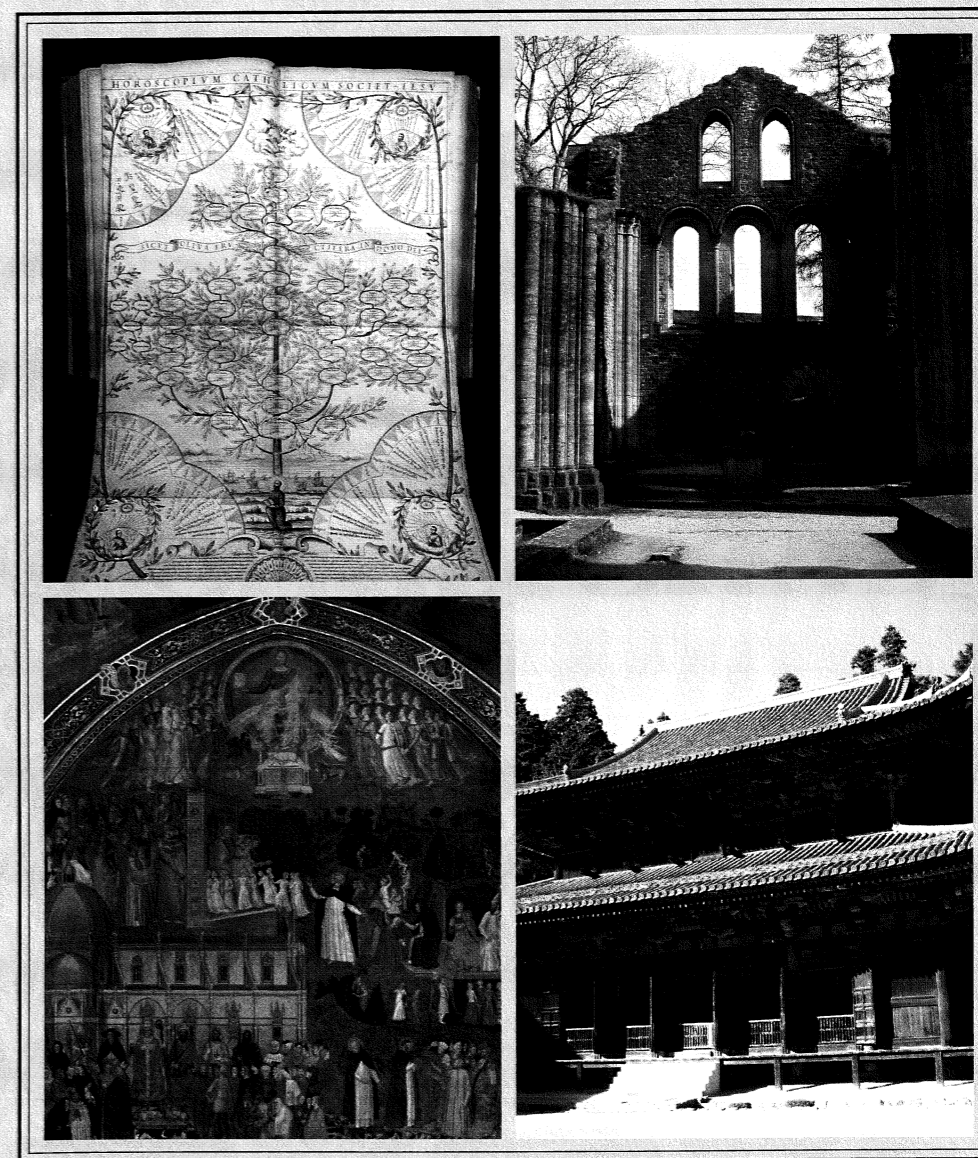
ReMo

中近世における宗教運動と  
メディア・世界認識・社会統合

文部科学省 科学研究費助成事業  
学術変革領域研究(B)2020～2022年度

リモ  
ReMo研  
ニューズレター

別冊



学術変革領域研究 (B) 2020～2022年度  
「中近世における宗教運動とメディア・世界認識・社会統合」

ReMo研 ニューズレター 別冊

2024年3月 発行

発行人 大貫 俊夫  
発行所 東京都立大学人文社会学部  
〒192-0397 東京都八王子市南大沢1-1  
TEL : 042-677-2109  
E-mail : ohnuki@tmu.ac.jp

領域ホームページ

<https://religious-movements.com/>

## アシジのフランチェスコはイスラムへの偽装改宗工作員だったのか： 日本の宗門改文学から

パトリック・シュウエマー (イエズス会班)

宗門改役が編纂に関係したと思われ、最古で最大の排耶物語集『喜利志祖伝名書』現装第2巻「きりしたん十二門派之事」(1614～1621年成立)には、難読の人名地名が多いため先行研究では敬遠されてきた<sup>1</sup>。しかし、本プロジェクトで探究した地中海文化史を念頭において読むと、南欧東欧イスラム界のごく最近の「再」征服とそのキリスト教化に伴う宗教・民族浄化、十字軍と大航海における特殊工作、人身売買、薬物貿易などが紹介されているということが判る。これらはキリスト界の修道会、騎士団、秘密結社の仕業として、史実・諷刺・デマを混じえ、騎士浪漫やピカレスク小説のような文体で語られている。

その中、第5次十字軍に際してアシジのフランチェスコ(1181～1226)がスルタン・アル=カーミルに謁見する場面(1220)は、セルバンテスも書いたような捕虜物語に脚色されている<sup>2</sup>。(史実と違って)偽装棄教をしてみせ、スルタンの側近となつては騙し討ちにするフランチェスコ。遂に「聖地保管権」という異教の地における外交特権をフランシスコ会のために勝ち取るに至る<sup>3</sup>。

サン=フランシスコの門派の事<sup>4</sup>。これはプランゼン<sup>5</sup>の国を取る時、数多の伴天連渡り、キリシタンを弘めけるに、征討度多し。十三度の御法度の時<sup>6</sup>、いづれのペアデレは山々に「隠るも有れば」逃ぐるも有り。我国へ帰るも有り。中にも三人留まりて、帝王の前に行き「キリシタンの御征討御尤もなり。我もパツパの文にてこそ、邪法を弘めては候へ。今よりは帝の御意に従ひ、イドロスをこそ拝み申すべけれ」とて、本尊の前にて即ち手を合はせ、師弟子三人転びけり<sup>7</sup>。それよりしてはサン=フランシスコ、ラウマの物語、我が学文の苦しからざる所ばかり荒まし語り、帝を慰めける程に、御気に入る事限りなし。ある時帝「ラウマの学文に神通を得る事はなきか」と問ひければ、伴天連これを聞き「総じてラウマには、四返を得る学文有り<sup>8</sup>。一但ゼンシヨにては叶わず。キリシタ

ンにさへなり玉は教へ申さん」と言ふければ、帝是を聞き「人間の上にて四返を得る事こそ重宝なれ。さらば我もキリシタンになるべし」とて、やがて名を授かり、其名をシルベシと付き給ふ<sup>9</sup>。其時伴天連、帝王の御一門、山に入玉ひて、七月ほど行をあそばせ「其時四返を得玉ふべし」とて、サンバ=モンテといふ山に<sup>10</sup>、帝王の一門五十人山居をせさせ、其間にラウマより大勢請い受け、サンバ=モンテに押し寄せ、帝王を始め【と】して一門五拾人悉く打ち捨て、たやすく国を強いたりけり。それよりこそ、サン=フランシスコの門派には、武略の役を給い、かやうなる窮命にも、国に帰る事なし。命の限り宗を弘むるものなり。

フランチェスコの同時代史料は乏しいが、弟子が書いた『第一伝記』(1229)でもシリアやモロッコを目指し、スペイン、クロアチア、エジプトを遊行している<sup>11</sup>。宣教活動が失敗したとしか書かれておらず口が堅いが、随分イスラム界に興味があったのは確かである。これほど簡単にアル=カーミルと話しに行けたというのも、アラビア語が話せたのではないだろうか。

そこで、少なくとも17世紀受容史の問題として気になるのはフランチェスコのトルバドゥール吟遊詩家としてのイメージである。まさに、弟子に吟遊詩家がいる(前掲Early Documents 2:316)自分も「森でフランス語で主を褒め唄う」ことを修行とし(1:194)、吟遊詩風の讚美歌を書き残している(1:164)など、初期史料でも吟遊詩と結び付けられている。ちなみに、ロマンス俗語文学の源流をなすこの吟遊詩がイスラムの影響下でできたという説がある<sup>12</sup>。イスラム界との文化交流に賑わう南フランスで誕生し、古代キリスト教には存在せず吟遊詩にもイスラムのスーフィー神秘詩にもある、神の愛を恋愛に見立てるなどの特徴だけでも興味深い<sup>13</sup>。アラビア文字のロマンス語で書かれたスーフィー神秘詩も伝っており、トルバドゥールという言葉もロマンス語による語源説がままならず、アラビア

語の語幹  $\text{طرب } \text{ToRoB}$  「歌う」説こそスッキリするかと思えば、近代の欧米人研究者によって度々執拗に撲滅されてきた。しかし事実、大英史観の生まれた19世紀まではヨーロッパでもイスラム界由来説が定説であった<sup>14</sup>。

まさに、フランチェスコの時代にはキリスト教とイスラム、ラテン語とアラビア語はまだ近世近代ほど相入れられない存在にはなっていなかった。もともと、イスラム統治スペインキリスト教界の長老が855年には「キリスト教徒は、アラブ人の詩歌や恋愛譚を読むのをこよなく愛し、アラブ人の法学者や哲学者の手になるものを、論駁するためではなく、正しく気品に満ちたアラビア語を会得するために読んでしまっている<sup>15</sup>」と嘆いたのに対し、13世紀には逆にイベリアのイスラム界は弱体化していた。同じように南イタリアを統治したアグラブ朝(800～909)も過ぎ去り、ノルマン人の侵攻でイタリアのイスラム教徒は社会の表舞台から姿を消した<sup>16</sup>。一方、フランチェスコの晩年の神聖ローマ皇帝フェデリーコ2世(在位1225～1250)は流暢にアラビア語が話せ、読み書きができ、パレルモの朝廷でイスラム哲学、天文学、音楽、詩歌を豪快に振興していた。そしてイタリア初の俗語詩を詠んだ吟遊詩シチリア派もまさに「洗礼されたスルタン」フェデリーコが主要なパトロンであった<sup>17</sup>。にもかかわらず、純ロマンス語、純「西洋」以外の影響源を語るのはイタリア詩を含め、西洋史学界ではまだ門前払いにされているきらいがある。我々日本の学者にはより客観的に考えるという課題が与えられているのではないだろうか。

さらに、フランチェスコが染まっていた吟遊詩に当時としてはイスラム的な色合いがあったとすると、西洋托鉢霊性自体はどうか。贈与というイスラムの基本義務を経済基盤として、(西洋の「騎士道」も影響を受けた確率の高い)フトゥワという支え合いの精神が普及した<sup>18</sup>。14世紀のイブン=バトゥータがスペイン、マリ、ロシア、インド、中国などを回った大旅行も、各地のイスラム教徒による施し物のお蔭で可能であった<sup>19</sup>。そしてイスラム界中の市場のひじりこそがこの托鉢的経済に身を委ね、詩歌を極める文豪、瞑想に耽るスーフィー行者、天文・数学・薬物の不思議を追究する博士となった。時には以上の知識を以て、のちにスペインのピカレスク小説にも出没するようなペテン師、盗賊、スパイ(そして近代資本家階級の母体?)にも転業した<sup>20</sup>。こういった托鉢的精神はキリスト教の原理だ

けでも展開されえたのであろうが、吟遊詩と同様、それという先駆者がキリスト教界には無く、フランチェスコ自身が度々行脚したイスラム界にはあるのである。これも今後の課題として、日本に軸足を置く研究者が大いに貢献できる可能性はないだろうか。

さて中世の史実関係はともかく、このフランチェスコ像は近世地中海の世界観に染まった日本人、おそらく宗門改役の協力者によって描かれた<sup>21</sup>。フランチェスコが見立てられているのは、激しく争うようになったキリスト教とイスラムの狭間で、身代金を当てに拉致されたり、イスラムに改宗して富裕な海賊やイエニチェリになったり、やがて帰郷できるように棄教が偽装に過ぎなかったという起請文をフランシスコ会士に書いてもらったりした地中海の人々である<sup>22</sup>。筆者を含め先行研究では迫害、潜伏、棄教、立ち返り、殉教がキリスト教としては古代以来、日本キリシタン独自の問題であるかのような了解が一般的だが、「きりしたん十二門派之事」の作者が示してくれるようにこれは少し違う。事実、セルバンテスの捕虜物語でも殉教の場面が定番である<sup>23</sup>。『天正遣欧使節記』でもイスラム海軍に拉致される危険性が言及されている<sup>24</sup>。

すると例えば「自殺的<sup>25</sup>」とよく形容されるルビーノ潜伏団二団(1642～43)が違って見える。彼らもきっと北アフリカで捕虜となったキリスト教徒を連れ戻すために身代金募金、開放交渉、時には潜伏と牢破り工作(前掲Cervantes 112参照)をする(特に托鉢会の)聖職者と同じことをしているという自覚があったはずである。日本で殉教した人も、棄教して生涯江戸キリシタン屋敷で監禁された人も、モロッコ、アルジェリア、チュニジア、エジプト、トルコに先輩がいるという自覚でいたに違いない。「きりしたん十二門派之事」の作者がアルビジョア十字軍、ハンガリー十字軍、イベリア「再」征服の場面で更にはっきりと示しているように、不堪ファビアン<sup>26</sup>が「千年ニアマツテ此方、兵乱ト云ヤウナル事モナク、謀叛逆心ナド申事ハ、マレニモ有事ナシ」と主張した「キリシタン国<sup>27</sup>」はある意味ごく最近「キリシタン国」にされたのであり、宣教師たちは例外なくその最前線で生まれ育ったのである。

- <sup>1</sup> 大桑齊『雪窓宗崔』同朋者 (1984)、Elisonas, «Acts, Legends, and Southern Barbarous Japanese», *Portugal e a China: Conferências nos encontros de história Luso-Chinesa, Convento da Arrábida, Fevereiro-Dezembro 2000*, ed. Alexandra Curvelo e Jorge Miguel dos Santos Alves (Fundação Oriente, 2001); Elisonas, “Journey to the West,” *Japanese Journal of Religious Studies* 34/1 (2007); Martin Nogueira Ramos, “The Monk and the Heretics,” *Japan Review* 35 (2021) が管見の限りである。
- <sup>2</sup> Cervantes『新訳ドン・キホーテ』岩根罔和 訳 彩流社 (2012) 前編39～40章、Cervantes, “*The Bagnios of Algiers*” and “*The Great Sultana*”, trans. Barbara Fuchs & Aaron J. Ilika (U. Penn, 2012); Cristobal de Villalón, *Viaje de Turquía*, ed. Fernando G. Salinero (Linkgua, 2010) 参照。
- <sup>3</sup> 以下、南郷晃子、井上舞ら (課題番号22K00317) と共同で撮影、校訂。臼杵市多福寺の住職関泰典に感謝申し上げる。
- <sup>4</sup> 托鉢会との「競り合い」の挙句、密告されて日本語で獄中書簡を書いたイエズス会士木村バスチャンも「修道会」のことをmompaと言っている。ARSI *Jap.Sin.* 34, 180r.
- <sup>5</sup> 第5次十字軍はナイル川三角洲ダミアエッタ市を包囲したが、底本「ふらん山」を近くのベルジウム市の転として捉える。
- <sup>6</sup> 1231年、十字軍の敗北でキリスト教徒が13人処刑された。Joseph P. Donovan, *Pelagius and the Fifth Crusade* (U. Penn, 2016), 104.
- <sup>7</sup> 「イドロス」「本尊」、メッカのカアバに祀られているとされた偶像か、或いは何となく古代ローマの迫害に見立てて。
- <sup>8</sup> 「死に返る」が「蘇る」を意味するという方言もある。『日本国語大辞典』。
- <sup>9</sup> フランチェスコの弟子にシルベストロがいた。
- <sup>10</sup> 底本「さんはもんで」。(ア) Jabal aş-Şahābah「教友の山」という霊山はシナイ山麓などイスラム界各地にある。1228年、アル=カーミルがキリスト教徒の臣下との友好関係を重視しワディ・ン=ナトルーンの修道院を訪問したというのは史実 (Mylod et al., *The Fifth Crusade in Context* (Taylor & Francis, 2016), 140)。フランチェスコの修行場として知られているのはイタリアのラヴェルナ山。
- <sup>11</sup> Armstrong et al., *Francis of Assisi: Early Documents* (New City Press, 1999), 1:229.
- <sup>12</sup> 前嶋信次『東洋文庫 イスラムとヨーロッパ』平凡社 (2000) 155頁。
- <sup>13</sup> Roger Boase, *The Origin and Meaning of Courtly Love* (Manchester U.P., 1977), 64–74.
- <sup>14</sup> María Rosa Menocal, “Pride and Prejudice in Medieval Studies,” *Hispanic Review* 53/1 (1985), 63–67.
- <sup>15</sup> Menocal『ムスリム、ユダヤ人、キリスト教徒の中世スペイン』足立孝 訳 名古屋大学出版会 (2005) 64頁、Charles-Emmanuel Dufourcq『イスラーム治下のヨーロッパ』芝絃子 訳 藤原書店 (1997)、Claudio Sánchez Albornoz『スペインとイスラム あるヨーロッパ中世』北田よ志子 訳 八千代出版 (1988)。
- <sup>16</sup> Luigi Andrea Bertó, *Christians and Muslims in Early Medieval Italy: A Sourcebook* (Routledge, 2023) 140.
- <sup>17</sup> Menocal, “Pride and Prejudice,” 74–75.
- <sup>18</sup> 中田考「西洋の騎士道と『フトゥーフ』について」スラミー『フトゥーフ イスラームの騎士道精神』山本直輝 訳 作品社 (2017) 179頁。
- <sup>19</sup> イブン=バトゥータ『東洋文庫 大旅行記』家島彦一 編訳 平凡社 (2002) 第7巻、28頁。
- <sup>20</sup> アル=ジャーヒズ「けちんぼども」前嶋信次 訳『世界文学大系 アラビア・ペルシア集』筑摩書房 (1964)、アル=ハリリー『東洋文庫 マカーマート 中世アラブの語り物』平凡社 (2008)、al-Jawbarī, كتاب الختار في كشف الأسرار The Book of Charlatans, ed. Manuela Dengler, trans. Humphrey Davies (NYU Press, 2020)。『ピカレスク小説名作選』牛島信明・竹村文彦 訳 国書刊行会 (1997) 参照。
- <sup>21</sup> 「きりしたん十二門派之事」巻末には、天正遣欧使節を批判する書簡を総長宛に書いたことで知られている (Elisonas, “Journey to the West,” 33) スペイン人イエズス会士ペドロ・ラモン (1611年没) の話に基づくという注記はあるが、本文の日本語が (国際経験豊かな) 母語話者らしく、ヨーロッパ生まれの人にしては欧州情報の誤解が多すぎる。
- <sup>22</sup> Burman et al., *Texts from the Middle: Documents from the Mediterranean World, 650–1650* (U. Cal, 2022); Daniel Hershenzon, *The Captive Sea* (U. Penn, 2018); Onofre Vaquer Bennasar, *Captius i renegats al segle XVII: mallorquins captius entre musulmans renegats davant la inquisició de Mallorca* (El Tall, 2014); Bartolomé Bennassar y Lucile Bennassar, *Los cristianos de Alá: la fascinante aventura de los renegados*, trad. José Luis Gil Aristu (Nerea, 1989).
- <sup>23</sup> Cervantes, *Two Plays of Captivity*, 62, 76, 127.
- <sup>24</sup> 『デ・サンデ天正遣欧使節記』泉井久之助 訳 雄松堂書店 (1969) 358頁。
- <sup>25</sup> Juan G. Ruiz de Medina, *El martirologio del Japón, 1558–1873* (Institutum Historicum Societatis Iesu, 1999), 255.
- <sup>26</sup> 版本『破提字子』(1620) の作者名「不干巴鼻庵」は侮辱的な換字に違いない。棄教前の天草版『平家物語』(1592) に見られる Fucan Fabian の漢字として「不堪」(Fabião da Santa Pobreza の訳か) を提案したい。
- <sup>27</sup> 「妙亭問答」『キリシタン書・排耶書』海老澤有道、土井忠生、大塚光信 編 (岩波書店1970) 175頁。

## 17世紀初頭前後の日本の宗教史と反キリスト教文学： パトリック・シュウェマー氏の論稿を読んで

服部 光真 (日本中世寺社班)

パトリック・シュウェマー氏の論稿は、大分県臼杵市の多福寺に所蔵される『喜利志袒仮名書』の一部「きりしたん十二門派之事」の説話を素材として、アシジのフランチェスコ (1181-1226) とそのイメージの17世紀における受容史の分析によって、吟遊詩や托鉢の精神にイスラム世界の影響があったこと、そしてこの説話自体が近世地中海の世界観の影響下、日本の宗門改役の協力によってまとめられたことを主張している。中世末期から近世初頭にかけての日本におけるキリシタンの文化や教義を考える上で、日本と西欧諸国の二項間の関係という単純化した枠組みにはとらわれず、南欧・東欧の地中海世界におけるイスラム界との諸関係、時代的にはフランチェスコの時代の12世紀、さらにはイスラム統治スペインの9世紀までも視野に入れ、空間軸・時間軸を大きく拡げることで、当時の17世紀のキリスト教が背負っていた歴史的な文脈への注意を喚起するものであり、従来の理解に大きな転換を迫る論点を含んでいるといえよう。

この『喜利志袒仮名書』は、『對治邪執論』などの排耶書の著作で知られる雪窓宗崔 (1589-1649) が住持を勤めた多福寺に、その著作『興福寺筆記』などとともに伝来し、類書のないその特異さから、その重要性は大いに認識され、注目されてきたところである<sup>1</sup>。しかし、シュウェマー氏が本稿の冒頭でこの『喜利志袒仮名書』について、「難読の人名地名が多いため先行研究では敬遠されてきた」と述べているように、内容そのものに踏み込んだ研究は多くないようである。それは、「難読の人名地名が多いため」ということもさることながら、杉山和也氏やシュウェマー氏自身も別のところで指摘しているように<sup>2</sup>、近世初頭以来のキリシタン文学や反キリシタン文学そのものが、日本文学史研究のなかで必ずしも正統視されず、軽視されてきたということと無関係ではないだろう。2022年12月に開かれた説話文学学会例会「キリシタン文化と説話文学——六世紀前後の〈異文化交流文学史〉」は、まさにこうした問題意識のもと企画されたもので、16-17世紀の異文化交流のなかで生み出されたキリシタン

文学、反キリシタン文学の固有の意義が見直されつつある。この例会にも登壇したシュウェマー氏は、こうした研究動向を牽引する論者の一人であり、今回の論稿でも、17世紀初頭の日本でまとめられた説話文学が、地中海文化史の大きな影響を受けていた当時の西欧の歴史的な脈が反映しているものとして位置づけられ、その有するグローバルな世界的規模での文学作品としての価値が遺憾なく主張されているといえよう。

こうした研究動向は、日本中世史研究に置き換えると「史料の拡大」という流れとして捉えることが出来ようか。卑近な例ではあるが、筆者は最近、日本の寺社に所蔵される木札文書の調査研究を積み重ねるなかで、木札文書への注目が、近代歴史学の始まりから紙本の古文書を中心に構築されてきた日本の古文書学・史料学そのものを相対化し、史料学そのものを再構築することにつながることを主張したことがある<sup>3</sup>。従来の研究史のなかで特殊・例外視されてきた資料群の意義を掘り起こしていくことは、その研究史が拠って立ってきた基盤そのものを見つめ直し、学問全体を再構築し、新しい局面へと進める大きな契機となる可能性を秘めている。キリシタン文学・反キリシタン文学への注目は、間違いなく日本文学史研究や、当時のキリスト教理解の全体にわたって、意義のある研究となることであろう。

ところで、本論稿におけるシュウェマー氏の叙述では、12世紀のフランチェスコの背景となる史実レベルの問題と、17世紀に受容された認識レベルの問題とが微妙に交差している。状況証拠を積み重ね、12世紀のフランチェスコや、吟遊詩、托鉢の精神とイスラム文化、アラビア語世界との関係についても説得力のある重要な指摘がなされているが、筆者にはいまその成否を判断する能力はない。当面検討されるべきは、シュウェマー氏も重視している17世紀における受容史の問題であろう。

この時代の日本の宗教史を考える者として、グローバルな異文化交流のなかでこうした文学作品が日本

社会のなかで生み出され、同時にイスラム界とキリスト教との接触に由来する諸文化、知識が小さからず日本社会にもたらされていたという指摘自体、驚きをもって受け止められた。その上で、こうした事実が、日本社会全体にとっていかなる意味を持っていたのか、こうした説話がいかなる階層に受容され、影響を与えていったのか、といった点は気になる点である。こうした説話を受容した階層は宗門改を担った支配者層や一部のインテリゲンチヤの間にとどまるものであったのか、排耶政策を通して間接的にでも広く日本社会のキリスト教・西欧理解に影響を与えていったものなのか、『喜利志祖仮名書』の文学史上の位置づけの特異さと相まって、今後追究されていくことが期待される。

一方で、『喜利志祖仮名書』が紛れもなく当時の日本社会で生み出されたことは、例えば「きりしたん十二門派之事」として当時のキリスト教を12の宗派・門流に分けて捉えていること自体に反映されている可能性がある。当時のキリスト教を12の宗派・門流で捉えるという理解のし方がどこから来ているのか、一般的であったのか、実態を反映しているのかという点は筆者には分からない。しかし、当時の日本社会では、近世仏教の、本末関係のヒエラルヒーをもった宗派の体制的確定へと向かいつつあったとはいえ、なお宗派内でも諸門流や地域的教団が、新しく成立した地縁共同体を捕捉して互いに激しく競合し合うという流動的な状況にあったという点に注意したい<sup>4</sup>。日本仏教側は宗門組織、教義の上での大再編の時期を迎えており、キリスト教に対してだけではなく、日本仏教の内部でも自己の宗派・門流の生存をかけて争う必要があったのである。その点、単にキリスト教対日本仏教という単純化した枠組みではなく、一步踏み込んでキリスト教を宗派や門流単位で理解するという視点は、当時の日本仏教のあり方からいっても自然なことであったように思われる。キリスト教の問題は日本の宗教史のなかでも特殊な問題とのみ捉えられがちではあるが、こうした文学作品自体が異文化交流を通して当時の日本の宗教全体の競合状況のなかで歴史的に生み出された産物として認識しうるとすれば、キリスト教の問題を当時の日本社会のなかで特殊・例外的な問題として片付けることが出来ないことを示唆するものであるといえよう。

日本キリシタンの特徴的な問題として捉えられてい

る迫害や殉教について、シュウェマー氏は、それが必ずしも日本独自の問題ではなかったと指摘している点も注目される。すなわち「日本で殉教した人も、棄教して生涯江戸キリシタン屋敷で監禁された人も、モロッコ、アルジェリア、チュニジア、エジプト、トルコに先輩がいるという自覚でいたに違いない」と述べ、ここでもイスラム界との緊張関係の最前線にあったキリスト教の歴史的な文脈のなかで捉え直すことを主張するのである。

18世紀フランスの思想家ヴォルテールによる小説『カンディード』(1858年)で、荒くれ者の水夫が「おれ様は水夫で、バタビア生まれだ。はばかりながら、これでも日本へ四回旅して四回踏み絵を踏んできた<sup>5</sup>」と主人公カンディードに言い放つシーンがある。ヴォルテールはドイツの医師ケンペルやフランスの宣教師シャルルヴォワ、フォントネラの著作から日本の長崎貿易や踏み絵などの情報を得ていたとい<sup>6</sup>、ヴォルテールの主著『寛容論』(1763)でも、キリスト教側の不寛容の結果という文脈ではあるが、日本におけるキリスト教の迫害や「外の世界に自国の門戸を閉ざし」たことに言及がある<sup>7</sup>。少なくとも『カンディード』の文脈は水夫の蛮勇ぶりを強調するためにわざわざ日本の絵踏が引き合いに出されており、『寛容論』でも迫害などを「ご存知のような結果」と表現しているように、日本の禁教・迫害政策の苛烈さは18世紀当時のヨーロッパではよく知られていたであろう。シュウェマー氏が問題視した、禁教・迫害を日本独自の問題と捉えること、あるいはキリスト教禁教・迫害の象徴として日本を捉えることは、実は近年の研究のみならず、それなりに根深い問題である可能性がある。シュウェマー氏の重要な指摘を受け、18世紀のヴォルテールにみられるような認識がいかに形成されていったのか、という点も、17世紀の異文化交流史の後世への影響として興味深い問題のように思われる。

以上大変雑駁ではあるが、17世紀初頭前後の日本社会とそれを取り巻く異文化交流史を考える上でもシュウェマー氏の問題提起は大きな示唆に富んでおり、日本中世史班としても考えるべき問題が多いといえる。何よりも、日本中世史専門の立場では自覚が無かったが、シュウェマー氏が強調するように、日本で日本の研究をすることの意義を噛みしめたいと思う。

<sup>1</sup> 大桑齊『史料研究 雪窓宗雀 禅と国家とキリシタン』(同朋社、1984年)。

<sup>2</sup> 杉山和也「キリシタン文学と日本文学史」(小峯和明監修・宮腰直人編『シリーズ日本文学の展望を拓く 第4巻文学史の時空』笠間書院、2017年)、パトリック・シュウェマー「バレット写本福音書朗読集と幸若舞」(『軍記と語り物』53、2017年)。

<sup>3</sup> 服部光真「中世木札研究の一視点—庶民信仰資料・仏教民俗資料と金石文をめぐって」(『奈良歴史研究』92、2021年8月)。

<sup>4</sup> 筆者による戦国期の宗教についての理解については、服部光真「キリスト教の受容と戦国期の民衆」(上川通夫・川畑博昭編『日出づる国と日沈まぬ国 日本・スペイン交流の400年』、勉誠出版、2016年)に論じた。

<sup>5</sup> ヴォルテール作・植田祐次訳『カンディード 他五篇』(岩波文庫、2005年) 286頁。

<sup>6</sup> 前掲『カンディード 他五篇』、497頁注30。

<sup>7</sup> ヴォルテール作・中川信訳『寛容論』(中公文庫、2011年) 42頁。

## 日本中世寺社班

### 説草・説話・縁起の関係：備前国の寺院縁起を素材として

菊米 一志 (日本中世寺社班代表)

かつての備前国にあたる地域(岡山県南東部)には、「備前四十八箇寺」「報恩大師建立四十八箇寺」などと称される寺院群がある。報恩大師は奈良時代における法相宗の僧侶で、備前国において四十八の寺院を開創したという伝承がある<sup>1</sup>。それらのほぼすべてが天台宗寺院なのだが、それが法相宗に属する僧侶によって建立された点とされる点は興味深い。これにはどうやら、12世紀後半における源平合戦の展開や、法相宗興福寺・天台宗延暦寺の対立抗争(末寺獲得抗争)といった問題が関係しているらしい<sup>2</sup>。伝承の起点となるのは、岡山市北区の金山寺に残される「備前金山観音寺縁起」という史料である<sup>3</sup>。

縁起は、12世紀の後半、備前国の国司に提出するために作成され、その後、15世紀末に備前国守護赤松氏の家臣浦上氏に提出されたと見られる。二度目の提出の際には、鎌倉時代以降の歴史的な事実も加えられており、「縁起の改変」がうかがえる典型的な事例である。いずれの提出においても、権力者による田地の寄進や土地争論における勝訴などの利益誘導が企図されており、このことは縁起が上申文書の性格をもつことを示す。

この縁起の第五段には、興味深い描写が見られる。金山寺常行堂の本尊阿弥陀如来像の由来に関する記述である<sup>4</sup>。

(前略) 有在家人、立持仏堂、奉崇之、爰彼檀那宅中有一人下女、給仕ス、此下女深信

此阿弥陀仏、主ニ給仕之隙者、備仏供致礼拝、昼夜六時念仏声不懈、彼家主者又物ヲ強ニ忌ヒテ祝事ヲ為棟、然間彼下女カ念仏申事、日比主イマイマシト思過処、歳暮、正月成近間、家主呼彼女云、汝穴賢正月ニハ、如日比念仏申事有ヘカラスト、強加制止之処、彼下女承スト申テ、如案正月一日朝、主之祝スル前ニテ、彼女如例南无阿弥陀仏ト申キ、主余腹立シテ、使ケル火箸ノ赤焼タルヲ以、頸骨ニ指当テ、ツキトヲシテ火印ヲ捺畢、下女悶絶シテ主之前ヲ立也、其後一兩日彼下女不差出、サテ件家主、正月三日参持仏堂、拜阿弥陀仏之処、彼金色像之御頸ニ火印黒シテ底マテ透徹レリ、家主成不思議之思、呼出彼下女、火印捺所ヲ見レハ、頸惣シテ無其疵、是時家主惟念スラク、サテハ本尊彼下女ニ代、此火印ヲ被捺給ニコソト、発露滯泣シテ令生改悔之心、即請仏前、彼本尊御頸ヲ奉補之処、膠脆シテ都テ不付、御頸疵如元也(後略)、

持仏堂に阿弥陀如来像をもつ「在家人」がおり、その家に一人の下女が仕えていた。下女は阿弥陀仏を信仰していたが、正月中に念仏を唱えたために主人から咎められ、首に火箸をあてられるという刑を受けた。正月中に死後の世界を願うことが不吉と見なされたのであろう。しかし、下女には火傷の跡もなく、阿弥陀如来像の首の部分に火箸の跡が残った。懺悔した